

Nishitani, Makiko. 2020. *Desire, obligation, and familial love: mothers, daughters, and communication technology in the Tongan diaspora*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

小 林 誠

本書はオーストラリアの都市メルボルンで暮らすトンガ人移民の社会的世界についての民族誌である。トンガ人移民の中でも女性たちが主な対象で、とりわけ母親と成人した娘との関係に注目している。本書で「トンガ人の社会的フィールド (Tongan social field)」と形容されるトンガ人移民の生きる社会的世界は、本国トンガをはじめ、オーストラリアの他の都市、ニュージーランドなどにおけるトンガ人ディアスポラとつながっている。そのため、著者は主にメルボルンで調査をしてきたが、調査対象となる社会的世界はそこで完結しているわけではない。人々は、電話やSNSなどを通して物理的な距離の壁を超えて関係を維持しており、その内実が詳細に検討されている。

それでは、章ごとに本書を紹介したい。1章ではまず「多文化」都市メルボルンにおいてトンガ人移民は必ずしも文化的な他者と交流し、相互の理解を深めているわけではないことが示され、彼らの日々の生活においてはトンガ人同士のつながりが極めて重要であることが説明される。それを踏まえた上で、これまでの地理的なスケールについての先行研究を論じ直す。とりわけ、移民研究で用いられることの多い「トランスナショナル (transnational)」は、むしろ国境を過度に強調し、本国と移民先以外のつながりを見えなくさせてしまっていると批判する。そこで著者は(社会的)空間を意味する *vā* というトンガ語の議論を参照しながら、文化的な価値を共有するさまざまな関係によって構成される「トンガ人の社会的フィールド」として彼らの生きる世界を見定める。著者によると、トンガ的な価値では、自己の地位を優位なものにするために他者と競争し、自己や自己の家族が「恥 (*mā*)」をかかないように適切に振る舞うことが必要とされるという。ただし、人々は必ずしも常に文化的な価値に沿って行動するわけではない。トンガ的な価値は時に問題化され、個々の文脈でどのように応じるべきか判断する必要がある、次章以降でその点が具体的かつ詳細に検討される。

2章では著者は社会的フィールドの前提となる「物理的フィールド」であるオーストラリアのメルボルンについて説明する。20世紀を通じて多くのトンガ人は首都トンガタブアや海外のアメリカ、ニュージーランド、オーストラリアなどの諸都市に移住してきた。現在、シドニーに比較してメルボルンではトンガ人の数は少なく、トンガの文化的な価値はあまり厳

しく実践されているわけではないが、それでも根強く残っている。トンガ的な価値において重要になってくるのが、社会的な関係に応じた適切な振る舞いと、関係を維持するための貢献である。つながりの中でも重要なのが親族である。例えば、著者は姉妹とその娘たちの間での日常的な助け合いを指摘し、親族的なつながりの中で、状況の変化に応じて世帯が柔軟に編成されることを論じる。他にも教会を通したつながりも強く、礼拝に参加しなくなったとしても教会を通して形成されたつながりは維持されると説明する。

3章では移民一世の母親が伝統的な価値に固執し、二世の娘がホスト社会の価値に溶け込むといった構図をあっさりと否定することから始まる。反対に、娘たちの主な交友関係は親族や同じ教会に通うトンガ人であり、そしてそこに居心地の良さを感じている一方で、母親たちが若かった時にはしばしば白人たちと交流していた。ただし、母親たちの多くはトンガ人男性と結婚し、子どもをもうけて育てていく中で、他の既婚のトンガ人女性との付き合いが深くなり、子どもにトンガ人として適切な振る舞いができるようにしつけていくようになる。著者は、適切な振る舞いの理想を「男子は外に行き、女子は内にいる (boys go, girls stay)」と説明する。男子が「外」の白人の世界で交流しても問題ないのに対して、女子は「内」で家事をこなし、同じトンガ人と交流することが期待される。とはいえ、女子たちは必ずしも自分の家の中に閉じこもっているわけではない。反対に、同世代の親族や教会の仲間といったトンガ人の社会的フィールドの内側において彼女たちは物理的に大きく移動する。女性の多くがトンガ人男性を結婚相手に選ぶなどトンガ人の社会的フィールドの内側で生きる。中にはそこから距離を置こうとする者もいるが、親族によって引き戻される力が男子より強く働くという。

4章では贈与に注目して、トンガ人のつながりを明らかにする。トンガ人による贈与では「愛 (*‘ofa*)」、「敬意 (*faka‘apa‘apa*)」、「相互の助け合い (*fetokoni‘aki*)」などが理想とされるが、実際には多くの女性がそれを「負担 (*kavenga*)」と感じ、「頭痛」の種でもあるという。経済的に裕福とはいえないにもかかわらず、家族・親族のために贈与すべきというプレッシャーが強く、本国の親族に洋服などのものやお金を送ったり、葬儀があればお金や食べ物を送ったり、トンガからの訪問客からくればその世話をし彼らの帰国のチケット代を負担したり、しなければならぬのである。特に20代から30代の女性の負担は重く、成人した娘として母親を支える一方で、妻として夫の親族からも期待されており、自分や自分の世帯の生活と家族・親族への義務の間で引き裂かれているという。この背景にはお金やものなどを贈ることそのものが愛や敬意を表すという点があり、そのため自分は適切に育てられなかったと感じる者の中には、成人後に母親にお金を送らないケースもある。女性たちは若い時には親族訪問の時に贈り物の運び手になるなどで贈与の一端を担いながら成長し、子育てを終えて年齢を重ねた後は娘から贈与を受けて教会に献金するといったようにその役割は年齢に応じて変化する。また、娘や妻として贈与をする側であるが、兄弟の配偶者から贈与を

受ける立場にあるといった具合に関係によっても異なることが説明される。

5章ではSNSに注目して、それがどのようにトンガ人の社会的フィールドに取り込まれていったのかを説明する。著者が調査していた2000年代後半はBeboがサービスを開始し、トンガ人の間で急速に広がっていき、やがてFacebookに取って代わられて衰退した時期と重なる。男性も利用していたが、とりわけ女性たちの間に広まっていったが、その背景にはトンガ人の社会的フィールドの内側の人々の情報を得て、彼らとの関係を維持するのに好都合であったという点がある。そのため、特に親しい親族が近くにいない者にとっては欠かせないものとなった。当時は、家のリビングに置かれたデスクトップ・コンピューターからアクセスすることが多く、娘たちはしばしば自分や親族の家に集まりオフラインでも交流しながら、SNS上でメッセージや写真をやり取りしていた。はじめは批判的だった母親たちも娘にやり方を教えてもらいながら利用しはじめ、娘たちに親族関係やトンガの伝統について教える機会にもなっていた。なお、当時は、Beboはトンガ語でトンガ人同士の交流、Facebookは英語でトンガ人の社会的フィールドから距離を置く者が利用するなどといった使い分けがなされていたという。

6章では「ファミリー・ドラマ」と形容される親族内でのちょっとしたもめごとの事例が3つ分析される。3つともにSNSと深く関連するものである。1つ目はある女性がオイの写真と彼を小馬鹿にしたコメントをSNS上に投稿すると、電話を介して伝わったオバによって皆が見ているからそのようなことは書くべきではないと（皆が見えるように）書き込まれ、オバを友達から外すという話である。2つ目はある男性が自分の妻の親族の葬儀に参列してもらうために自分の母親に首都トンガタブに行ってもらったが、葬儀が終わっても帰りの分の航空券代を振り込まず、電話にも出なかったため、母親のメイによって子どもたちがお金を払わないから帰れないとSNS上に書き込まれ、それを見て男性のオバがお金を振り込んだという話である。3つ目はある女性が小規模な披露宴での結婚式を計画していたが、母方のオバに知られるとそれが台無しになってしまうと考え、彼女がトンガに滞在している時に敢行するという話である。残念ながら詳細に紹介できなかったが、3つの事例の肝であり、そしてその魅力でもあるのがトンガにおける複雑な親族関係とその関係ごとの適切な振る舞いである。他にも、トンガではインターネットへのアクセスが難しいことや、そもそも年長女性はインターネットではなく電話を利用するなどの情報格差やメディアの種類の差異も関わってくる。電話に出てしまうと送金せざるを得なくなるため居留守を使ったり、何か問題が起きた場合には機器の故障であるとしたりするといった点も説明されている。しかし、様々な問題が起きるが、一度や二度のもめごとで関係が全て解消されるほどトンガ人の親族的なつながりは脆弱ではないことが論じられる。

7章の結論ではまずフィールドワークをはじめてから10年以上経過した中での人々の変化について回顧し、母親になったり、かつてはトンガ人の社会的フィールドから距離をおい

ていた女性が病気を契機にその考え方を変えたりなどが説明される。そして、理論的には、トランスナショナルという枠組みではなく、人々の視点から彼らの社会的世界を捉える必要性が再度論じられる。最後に、娘たちは母親の世代ほどではないにしても、現在でもトンガ人の社会的フィールドの「重力」の影響を受けており、好むと好まざるとにかかわらず、その世界を生き続けていると締め括る。

本書の理論的な位置付けに関してはすでに著者によって十分にまとめられているので、ここでは同じオセアニアをフィールドとする立場から多少のコメントをしたい。本書を読んで、トンガ人ディアスポラの社会的世界のつながりと広がりを感じた。著者も引用するように、それはまさにハウオファが「島々の海 (sea of island)」で論じたオセアニア世界における島々のつながりとひろがり、先進国への移民という文脈においても再現されているといえるだろう。そして、移民研究でしばしば前提とされる第一世代、第二世代およびそれに付随するイメージとは異なり、そのつながりは複雑で、重層的で、多様であることが説得力を持って記されている。とりわけ、同じポリネシア系の人々を調査しているとはいえ主に男性年長者と一緒にいる機会が多かった評者にとっては、それまで遠くから眺めているに過ぎなかった女性たちの世界についての記述は目を見張るものが多かった。

多くの民族誌への目配りによって通文化的な厚みを持たせながら、本書はトンガ人移民女性の世界に私たちを誘い、彼女たちがどう生きているのかについての多くの物語を聞かせてくれる。挙げればきりがないが、例えば4章の女の子たちが親族への贈与の運び手となるという話では、休暇をトンガで過ごす3人の10代の少女たちは、洋服、香水、DVDなどの大量のお土産を手にもオークランドから来るが、帰る時、それらをすべて渡してしまうのはもちろんのこと、自らが来てきた服も、化粧品も、スーツケースすらも置いてくるという記述には思わず息を呑んだ。

これは著者が女性であるから知りえたという単純なものではなく、トンガ人の社会的フィールドに自らを「編み込む (weaving)」不斷の努力が背景にあることは想像に難くない。著者は教会に通い、台所仕事を手伝い、教会に寄付をし、宴会に食べ物を持っていったという。そして、お世話になった家族などに紹介してもらって知り合いを増やしていき、その過程でSNSも活用しながら、トンガ人の社会的フィールドでフィールドワークを行ってきた。

本書は「外」の私たちが読んでわかるように噛み砕いて描かれているが、それだけではない。1章に掲載されている本書に対するトンガ人女性のコメントには、読む前には自分の経験を説明する言葉を持たなかったと書かれているが、それは「内」の人たちにとっても無意識に実践していた文化的な価値について改めて考える契機にもなっている。この無意識という点は、著者がトンガ人の社会的フィールドに引き込まれることを「重力」と表現している

点と重なる。それは目に見えることはできないが、確かに存在し、そして、知らず知らずのうちに行動や考えに影響を及ぼしているのである。現地の人々が日々行なっているものの、あまりにも自明すぎて説明できないことを説明するのが、外から内に入り込む人類学者の「面目躍如」といっていいかもしれない。

しかし、それは口にしたり、書いたりすることで、トンガ的な価値と齟齬をきたす。この点に関して、贈与を扱った4章における首都ヌクアロファで開かれた会議のエピソードは印象的である。トンガ人の学者や政府関係者の前で、贈与が負担として女性たちに感じられている点について説明した時、女性たちの多くが同意を示してくれたのに対して、男性たちは贈与は愛に基づくものであり、その否定的な側面を強調しすぎていると批判してきたという。著者はトンガ人もまた文化的な価値の通りに行動しているわけではなく、ときにそれを問題化しながらも対処していると論じているが、この点は著者の振る舞いそのものにも共通しているという印象を受けた。

評者からすると、本書はマキコという日本人がトンガ人の社会的フィールドに入り込み、そして、その中でうまく対処していくようになった成長の物語として読んでしまう誘惑にかられる。本書の冒頭の謝辞では、著者がオーストラリアのメルボルンにおいて初めてトンガ人教会を訪問したときのことが示される。著者が「初めから一人ではなかった」というように、教会の扉を開けた時、トンガ人女性が満面の笑顔で迎え入れてくれた。そして、ホテルに泊まって、タクシーでここまできたと伝えと、毎週日曜日の礼拝のみならず、他のイベントにも車で乗せて行ってもらいようになり、それは別のトンガ人家族のお世話になるまで続いたという。そして、当然のように時に失敗もある。例えば、著者もそこにいる人たち全員の飲み物を買わなければならない場面で、幼児の分を忘れてしまったことから、ケチだという悪評が流れてしまった。それを聞いた著者の「母親」は訪問客がいる時にあえて生活必需品を買ってこさせることで、実は寛容な人間であるという評判をつくることに成功する。

7章の結論で、10年前を振り返る著者の限りなく深いやさしさに満ちた筆致も印象的である。とりわけ目を引くのはイシという青年との思い出である。イシは現在、たびたび警察の世話になってしまっていると本文で説明し、注には彼と共有する思い出について書く。まだ小さい頃に付き添いで行った床屋の理容師に、彼女は誰かと訊かれたイシが「マキコは姉だ」と答えた、という話だ。かけがえのない思い出としながらも、著者はそれを人類学者が現地社会に受け入れられたと安易に解釈することを退ける。そして、人類学者がフィールドの人々から受け入れられる一方で、人類学者はそれにどの程度応えられているのかと問い、自らのフィールドワークをあくまで批判的に検討しなければならないと、自戒を込めて書く。著者はあくまでも人類学者としてその倫理的態度を考え続ける。

インゴルド [2020] がいうように、人類学は「人々とともに」「どのように生きるのか」を研究するものだとするならば、本書はマキコという人類学者がトンガ人女性とともに、ど

Nishitani, Makiko. 2020. *Desire, obligation, and familial love: mothers, daughters,*

のように生きるのかをめぐって考えたことを私たちに教えてくれる。本書はまさに人類学的フィールドワークの伝統を受け継いだ珠玉の民族誌だといえよう。

参 考 文 献

インゴルド, ティム 2020『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子(訳), 亜紀書房。